

# 生活科を中核に据えた小学校低学年における カリキュラム・マネジメントの在り方

## A Study of Curriculum Management in Lower Grades of Elementary School Focusing on Living Environment Studies

若手 三喜雄・小川 聖子  
Mikio WAKATE・Seiko OGAWA

### 概要

今回の教育課程の改訂では、「社会に開かれた教育課程」を目指すという理念が示された。理念の実現には、各学校のカリキュラム・マネジメントが求められる。小学校低学年でのカリキュラム・マネジメントは、「生活科」を中核として、子どもの実態を基に、学習内容を他教科等と関連させることが大切である。幼児教育との円滑な接続を図る上からは、カリキュラム・マネジメントの考え方を取り入れたスタートカリキュラムを編成・実施することが大切である。入学当初から子どもがもてる力を十分に発揮できるカリキュラム編成のため、生活科を中核に据える意義と編成の手順、小学校低学年における具体的な実践事例を提案する。

キーワード：社会に開かれた教育課程、カリキュラム・マネジメント、生活科、スタートカリキュラム、小学校低学年

### Abstract

The current revision of school curriculums presented the aim for the “community-based curriculum.” To achieve it, the curriculum management by each school is necessary. For the curriculum management of lower grades of elementary schools, it is important to relate the learning contents to those of some other subjects with a central focus on Living Environment Studies based on the real picture of children. Also, with a view point of smooth transitions from early childhood to elementary school education, it is important to design and implement the start curriculum based on the concept of the curriculum management. In order to design the curriculum where children can demonstrate their ability from the beginning of the entrance, this study discusses the significance and procedures of the curriculum design focusing on Living Environment Studies, and also presents some cases in lower grades of elementary school.

**Keywords:** community-based school curriculum, curriculum management, Living Environment Studies, start curriculum, lower graders of elementary school

### 1. はじめに—研究の目的—

2014年11月20日、中央教育審議会に対して、文部科学大臣から『初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について』<sup>(1)</sup> 諮問された。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展、技術革新等による、変化の激しい社会の中で、新しい時代を生きる上で必要な資質・能力を確実に育てていくことを目指した学習指導要領の在り方について諮問され、大きく三つの視点から審議が求められた。一つは、教育目標・内容

と学習・指導方法、学習評価の在り方を一体として捉えた新しい時代にふさわしい学習指導要領等の基本的な考え方についてである。二つは、育成すべき資質・能力を踏まえた、新たな教科・科目等の在り方や、既存の教科・科目等の目標・内容の見直しについてである。三つは、学習指導要領等の理念を実現するための、各学校におけるカリキュラム・マネジメントや、学習・指導方法及び評価方法の改善を支援する方策についてである。

中央教育審議会教育課程企画特別部会を中心に審議され、2016年12月21日、『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について』<sup>(2)</sup>の答申が示された。この答申では、少子高齢社会、グローバル社会、人工知能社会が予測される2030年の社会の変化を見据えて、学校を変化する社会の中に位置づけ、学校教育の中核となる教育課程については、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会とが共有し、必要な資質・能力を身に付け、社会と連携・協働により実現を図っていくという「社会に開かれた教育課程」を目指すという理念として位置づけられている。「社会に開かれた教育課程」の理念のもと、子どもたちに新しい時代を切り拓いていくために必要な資質・能力を育むために必要なこととして、答申には、大きく次の三点があげられている。一つは、学習指導要領等の枠組みの見直し、二つは、教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現、三つは、「主体的・対話的で深い学び」の実現である。学校教育においてこれら三点を確実に実施することが、今回の改訂のキーワードとなる「社会に開かれた教育課程」の理念のもと、教育課程全体を通じて、子どもたち一人一人に資質・能力を育むことにつながることになる。

そこで本稿では、上記の三点の中で、教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の在り方について明らかにしようとするものである。特に、小学校低学年における「カリキュラム・マネジメント」に視点を当て、効果的なカリキュラム・マネジメントの在り方として、生活科を中核に据えて取り組むことについて提案するものである。

## 2. カリキュラム・マネジメントとは

カリキュラム・マネジメントとは、学校の教育目標の実現に向けて子どもや地域の実態を踏まえ、教育課程を編成・実施・評価し、改善を図る一連のサイクルを計画的・組織的に推進していくことであり、そのための諸条件を整備することである。

### 2.1 中央教育審議会答申で示すカリキュラム・マネジメント

カリキュラム・マネジメントについては、2016年12月21日の中央教育審議会答申の中で、「社会に開かれた教育課程」の実現を通じて、子どもたちに必要な資質・能力を育成するという理念を踏まえて、以下の三つの側面が述べられている。<sup>(3)</sup>

- ①各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- ②教育内容の質の向上に向けて、子どもたちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。
- ③教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源を含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

カリキュラム・マネジメントは、子どもの主体的な学びを重視して学習活動を展開していくことを想定すると理解できる。課題の解決に向かって、協働して取り組む上では、教科を分科して思考するよりも、様々な考えを総合してとり組む場面が多くなることが考えられる。その意味では、教師は教育内容を柔軟な発想で相互の関係性の基で考えることが求められることになる。また、当然その解決に向けては教育活動に必要

な様々な資源を活用していくという発想も大切になってくる。しかし、このような学習活動では系統的に理解することが難しくなることが予想され、教育活動における質の低下の問題が起りかねないことになる。そのため、PDCAサイクルでの見直しが重要な役割を担ってくることになる。

## 2.2 中央教育審議会答申で示すカリキュラム・マネジメントの焦点化

田村は、カリキュラム・マネジメントの3つの側面として、カリキュラム・デザインの側面、PDCAサイクルの側面、内外リソース活用の側面として、端的にまとめている。そして、この3つの側面の中でも、最も重要とする1番目のカリキュラム・デザインの考え方を基に、「つなぐ」をキーワードに、カリキュラム・マネジメントの在り方を述べている。<sup>(4)</sup>

村川は、PDCAサイクルの側面に視点を当て、「子どものカリマネ」として、子どもが自らの学習活動をPDCAサイクルで組み立てることの重要性と、「単元のカリマネ」として、教師がPDCAサイクルを意識して単元・授業を設計することの重要性を述べている。<sup>(5)</sup>

学習活動の場面を考えたとき、子どもが主体的・対話的で学びが深まってくると、課題の追究に当たり、一つの教科という枠組みの中に入ることは難しくなってくる。これまでは、特に生活科や総合的な学習の時間が、子どもの主体的・探究的な学びとして位置づけられ、生活科や総合的な学習の時間の中で、教科等の関連的な指導が取り組まれてきている。例えば、若手・杉江・伊東・岩切・野田は、『他教科等との関連を図った指導の工夫』<sup>(6)</sup>の中で、生活科と他教科等との関連を図った取り組みの提案で、生活科と国語科との関連を図った取り組みを論じるとともに、今後のより一層の発展的な取り組みの可能性を指摘している。ここでは、関連を図るには、子どもの意識の流れを予測し、子どもの意識の流れに沿った学習活動を展開することが子ども主体の活動が高まることなどについて論じている。しかし、これまでも、教科の学習については、教科の系統性を軸に文化を伝承する形で計画的に取り組まれてきていることから、各教科ごとに学ぶべき道筋を異なったものとして捉え、学力の向上が叫ばれる中、関連的な取り組みの発展は不十分であった。若手他の論文でも指摘しているように、これを、子どもの主体的な学びに当てはめたときには、各教科ごとの横のつながりも意識して取り組むことが求められてくることになる。これからの学習活動で重視すべき、「主体的・対話的で深い学び」を考えたときには、カリキュラム・マネジメントを進める上で焦点化すべきは教科横断的なカリキュラムの作成にあるものと考えられることができる。

## 3. 小学校低学年のカリキュラム・マネジメントに「生活科」を中核に据えるわけ

小学校低学年におけるカリキュラム・マネジメントに「生活科」を中核に据えるわけを、学習指導要領の変遷から考えてみることにする。

### 3.1 平成元年学習指導要領から

教科等の横のつながりを考えるには、低学年においては「生活科」が中核となる。「生活科」はその誕生時から、総合的な教科としての位置づけがなされてきていた。平成元年の学習指導要領<sup>(7)</sup>「第5節生活 第3指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い (4) 言語、造形などに関する指導との関連を図り、指導の効果を高めるようにすること。」と述べられている。その解説の中で、以下の3点について述べられている。①生活科における活動や体験が、生活科以外の教科等の学習への動機付けとなり生活科の学習が他の教科等の学習へ広がり、それらの学習の充実に役立つということになる。②他教科等の学習の成果を、生活科の活動の中に適切に生かすためには、相互の関連について十分検討し、指導計画に明確に位置付けておくことが必要である。③教科の目標や指導内容の一部について、これを合科的に扱うことによって指導の効果をあげる工夫をすることである。

このように生活科には、誕生当初から、子どもの主体性・能動性が求められ、他教科等と関連させることで、より生活科や他教科等が相互に効果を高め合う学習活動が求められていたわけである。

### 3.2 平成10年学習指導要領から

平成10年の学習指導要領<sup>(8)</sup>「第5節生活 第3指導計画の作成と各学年にわたる内容の取扱い (6) 国語、音楽、図画工作など他教科等との関連を図り、指導の効果を高めるようにすること。」と述べられている。そして、その解説の中で、平成元年誕生時の解説と同様に以下の3点について述べている。①生活科の学習の成果を他教科等の学習に生かすことである。②他教科等の学習成果を生活科の学習に生かすことである。③教科の目標や内容の一部について、これを合科的に扱うことによって指導の効果を高めることである。平成元年の生活科誕生から初めての改訂の中で、国語、音楽、図画工作などの教科名を具体的に示すことで、子ども主体で展開される学習活動において、関連することが予測される教科名を示すことで、教師自身にも他教科等との関連を図った、計画的な指導が求められたことが分かる。

### 3.3 平成20年学習指導要領から

平成20年の学習指導要領<sup>(9)</sup>「第5節生活 第3指導計画の作成と内容の取扱い (3) 国語科、音楽科、図画工作科など他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。特に、第1学年入学当初においては、生活科を中心とした合科的な指導を行うなどの工夫をすること。」と述べられている。

この解説の中では、他教科等との関連についての考え方そのものは変わらないが「積極的に」との文言が加わり、これまで以上に他教科等との関連を図ることが期待されている。また、入学当初は生活科を中心とした合科的な指導が求められている。「スタートカリキュラム」という文言が明記され、幼児教育から小学校教育への円滑な接続が求められている。

### 3.4 平成29年学習指導要領から

平成29年3月告示の新学習指導要領<sup>(10)</sup>においては、「第5節生活 第3指導計画の作成と内容の取扱い (4) 他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高め、低学年における教育全体の充実を図り、中学年以降の教育への円滑な接続ができるようにするとともに、幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること。特に、小学校入学当初においては、幼児期における遊びを通じた総合的な遊びから他教科等における学習に円滑に移行し、主体的に自己を発揮しながら、より自覚的な学びに向かうことが可能となるようにすること。その際、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や、弾力的な時間割の設定を行うなど工夫すること。」と述べられている。これまでに比べて、①より積極的な関連が求められること、②教科等が特定されず全ての教科等も含めていること、③入学当初は生活科を中心とした合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定をすることの3点が特に求められている。

以上のように学習指導要領の変遷をみても、平成元年から改訂を経るたびに、生活科を中心とした他教科等との関連を図った取り組みの大切さが強調されてきていることが分かる。このことは、小学校低学年の教科である生活科の特質からもいえることである。

## 4. 生活科の特質を踏まえた小学校低学年におけるカリキュラム・マネジメントの在り方

中野は、生活科の新設に当たって、今なぜ生活科なのかとする問いに、21世紀への小学校教育への4つの問題提起をしていると述べている。①体験を重視する、②個性を生かす、③家庭や地域のとのかかわりを見直す、④授業を変えるの4つである。特に、4つめの「授業を変える」ことを主眼として、生活科はこれまでの伝統的な教師中心の授業観の変革を目指していると述べている。<sup>(12)</sup>

#### 4.1 子どもの発達特性から

平成元年の学習指導要領解説生活編<sup>(6)</sup>では、低学年の子どもの発達特性として、①具体的な活動を通して思考すること、②身近な環境を一体的に捉えること、③自分との関わりで捉えることなどがあげられている。子ども理解に基づいて、子どもの視点を大切にされたカリキュラムが求められていた。カリキュラム・マネジメントの中での1番目に述べられているところの「各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと」<sup>(11)</sup>とは、教師中心のカリキュラムから、子どもの学びの視点に立ってのカリキュラムの編成ということができる。また、学問を系統的に分科して捉え、カリキュラムを編成するのではなく、子ども主体で総合的に捉えるという、生活科がねらいとする子ども中心の学びの在り方の大切さが示されていると考えることができる。

#### 4.2 子ども主体の学習活動の展開から

若手他『他教科等との関連を図った指導の工夫』<sup>(6)</sup>で論じられているように、子ども主体の学習活動の展開は、子どもの意識の流れに沿って、他教科等の学習活動を効果的に関連付けることが大切である。小学校低学年においては、具体的な活動や体験を通して学ぶ生活科を中核としたカリキュラム・マネジメントを進めていくことが、低学年の発達特性から捉えた学習活動を展開する上で大切になってくる。また、生活科を中核とすることの大切さが、生活科が誕生した原点に帰っても捉えることができる。小学校低学年におけるカリキュラム・マネジメントとは、生活科を中心に据えて、子どもの理解に努め、子どもの思いや願いを生かして、学びたいことを連続させていくことでカリキュラムをデザインしていくことと捉えていきたい。教育内容面でのデザインと同時に、学校や地域も含めた子どもの身の回りの人的・物的資源を活用することも含めてデザインすることが大切になってくる。

#### 4.3 資質・能力の育成を目指す教師の視点から

中央教育審議会答申<sup>(13)</sup>において、生活科における「見方・考え方」としては、「身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、比較、分類、関係付け、試行、予測、工夫することなどを通して、自分自身や自分の生活について考えること」と述べられている。生活科の学習活動は、この「見方・考え方」を生かして、生活科で目指す次の3つの資質・能力を育成することを目指している。

- ①活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。
- ②身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。
- ③身近な人々、社会及び自然に自ら働きかけ、意欲や自信をもって学んだり生活を豊かにしたりしようとする態度を養う。

上記の資質・能力を育成するためには、教師自身が子どもの学習活動を予測しながら、カリキュラム・マネジメントすることが求められてくる。一つの視点からだけで、子どもを取り巻く環境を捉えていたのでは資質・能力を育成していくことは難しい。様々な視点から課題発見も含めその解決に向けて取り組みを進めることができるようなカリキュラム・マネジメントが求められてくる。そのことによって、子ども自身が生活を豊かにすることができるようになるものと考えられる。

### 5. 小学校低学年におけるカリキュラム・マネジメントの手順

カリキュラム・マネジメントの進め方については、子どもの思いや願いを基にすることを基本とする。基

本的には、子どもの学びを中心に据えながら、学びが連続発展していくように構想することである。生活科の授業づくりにおいて行っている手法を用いていくことを基本とする。

#### 5.1 子ども、学校、地域の実態を把握し、1年間を見通して育てたい子どもの姿を明確にする

子どもの実態を捉えることから始める。スタートカリキュラムでは、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を基に実態を把握することが必要である。また、教科等との関連を図る場合には、子どもの学び方や子どもの学びと関連する地域の実態把握も必要になってくる。これらの実態だけでなく、1年間を見通して育ってほしい子どもの姿を明確にしておくことも大切である。

#### 5.2 生活科を中心に据え、各教科等の資質・能力の一覧表を作成する

資質・能力の育成を基盤とした学習指導要領を視野に入れると、各教科等の資質・能力の一覧表を作成する必要がある。資質・能力を一覧表にすることで、教科等を横断する学びの大切さが見えてくる。低学年においては総合的な教科としての生活科で目指す資質・能力を中心に据えることで、他教科等との関連性が明確になってくる。

#### 5.3 生活科を中心に据え、他教科等との関連を明確にした単元配列表を作成する

資質・能力の一覧表の次には、単元配列表の作成が必要になってくる。資質・能力では明確になってこなかった学習活動が明確になってくるからである。生活科を中心として、関連する各教科等の単元配列表を作成し、関連する学習活動をイメージすることである。学習環境、学習活動、それらを通して育まれる資質・能力がより明確になってくる。

#### 5.4 単元ごとの関連を明確にした指導計画を作成する

単元配列表を基にしなが、単元ごとの指導計画を作成することである。ここで初めて、学習活動における教科等の単元レベルでの関連が明確になってくる。PDCAサイクルに乗せるためには、最終的に単元レベルにまですることで、評価が可能になってくる。また、人的・物的資源を効果的に活用する計画も明確になってくる。

#### 5.5 実践を通して、指導計画を評価し改善を図る

最終的には、PDCAサイクルを効果的に活用し、実践に基づいた指導計画の評価・改善を図っていくことである。カリキュラム・マネジメントは、計画を作成することが目的ではなく、教育課程の実施を通して、一人一人に資質・能力を確実に身に付けさせることが求められるからである。

### 6. 小学校低学年におけるカリキュラム・マネジメント例

ここでは、小学校低学年のカリキュラム・マネジメントの事例として、入学時のスタートカリキュラムと他教科等との関連を明確にした年間指導計画の事例を提案している。スタートカリキュラムについては、これまで埼玉県教育委員会からは、『接続期プログラム』<sup>(14)</sup>、『接続期プログラム実践事例集』<sup>(15)</sup>として、子どもや教員を含めた幼保小の交流活動や初めての教科学習としての学び方に関する指導事例などが示されている。また、「生活、他者との関わり、興味・関心」を視点として教科学習を焦点化しての指導事例などが示されている。ここでは、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」に基づくとともに、生活科を中核としたスタートカリキュラムを提案する。また、他教科等との関連を明確にした年間指導計画の事例を提案するものである。

## 6.1 生活科を中核としたスタートカリキュラムの事例

従来のスタートカリキュラムでは、幼児期の終わりまでに培ってきている資質・能力を明確するとともに、さらに伸ばしていくためのカリキュラムという視点はなかった。ここでは、平成29年の学習指導要領で示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を明確にしたカリキュラムを提案するものである。

### (1) 適応指導からスタートカリキュラムへ

入学直後の児童に対して、これまでは、主に小学校生活への適応指導として、きまりやルールの習得を中心とした指導がなされてきた。一方、スタートカリキュラムでは、児童の学びはゼロからスタートするのではなく、幼児期までに培ってきた資質・能力を土台として、安心して自信をもって学校生活をスタートできるようにすることをねらいとしている。

平成29年3月告示の小学校学習指導要領<sup>(10)</sup>「総則」には、教育課程の編成に当たって配慮すべき事項として、次のように示されている。

幼児期の終わりまでに育って欲しい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。（「総則」第2-4 学校段階等間の接続 (1)）

幼児教育においては、その特質から、幼児教育において育みたい資質・能力は、個別に取り出して身に付けさせるものではなく、遊びを通しての総合的な指導を行う中で、「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」、「学びに向かう力・人間性等」を一体的に育てていくことが大切にされている。小学校教育においては、このような幼児教育の特質を理解し、学校全体で共有しながら、接続期における教育課程を編成・実施していくことが求められる。

### (2) 幼児期の終わりまでに育って欲しい姿

今回の改訂では、幼児教育と小学校教育の円滑な接続を図る観点から、5歳児修了時までに育ってほしい具体的な姿について10項目に整理した「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」が平成29年3月告示の幼稚園教育要領<sup>(11)</sup>に新たに位置付けられた。

これは、前述の資質・能力の三つの柱を踏まえつつ整理されたもので、幼稚園修了時の園児の具体的な姿を示している。スタートカリキュラムにおいては、この「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」を引き継ぎ、生かすことから始める。幼児期の終わりまでに育って欲しい姿とは、「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」の10の姿である。幼児教育で何を育て、子供は何を学ぶかは実際には見えにくいものである。そこで、それを理解しやすくするために、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」としてまとめ、幼児教育においてそれを育てることとした。同時に、小学校の始まりにおいて、その10の姿をさらに伸ばしていく中で、小学校教育の基礎をしっかりと育てることを目指している。

また、この「10の姿」は、幼稚園においては、5歳児後半の評価の手立てとなるものでもある。幼稚園等の教師と小学校の教師が、この10の姿を参考にしながら、5歳児修了時の姿を互いに共有化することにより、幼児教育と小学校教育との接続の一層の充実が図られることが期待できるものと考えられる。

そのためには、近隣の小学校と幼稚園の教師同士の意見交換や授業参観、授業研究会など、合同の研修の機会を設けて、「幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿」を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めることが重要になってくる。また、今後は、市町村教育委員会に

よる積極的な働きかけや研修会等の実施も必要になるものとする。

### (3) スタートカリキュラムの作成と実施

今回の改訂では、「スタートカリキュラム」の作成と実施が義務付けられた。平成29年3月告示の小学校学習指導要領<sup>(10)</sup>「総則」には、小学校入学当初の教育課程の編成に当たって配慮すべき事項として、次のように示されている。

特に、小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと。（「総則」第2-4 学校段階等間の接続 (1)）

幼児期の教育は、遊びや生活を通して総合的に学んでいく教育課程等に基づいて実施されている。一方、小学校教育は、各教科等の学習内容を系統的に配列した教育課程に基づいて実施されている。このことが幼児期と児童期の教育の大きな違いと言える。そのため、児童が、幼児教育で培われた資質能力を十分に発揮しながら安心して伸び伸びと小学校生活を送るためには、入学当初におけるスタートカリキュラムの編成と実施が重要になる。

スタートカリキュラムとは、小学校に入学した子どもが、幼稚園・保育所・認定こども園等の遊びや生活を通じた学びと育ちをベースとして、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくためのカリキュラムである。各学校においては、小学校生活はゼロからのスタートではないことを正しく認識することが大切である

### (4) スタートカリキュラム編成の留意点

スタートカリキュラムは、短くて4月末、長くて1学期終了までと、その取組は自治体や学校によりさまざまである。1年間の教育課程全体のバランスや児童の実態、教科等との関連を考慮すると、4月から5月にかけての活動全体をスタートカリキュラムと捉えるとよいだろう。編成の際に留意すべきことについて、以下に4点述べる。

#### ① 幼児期の子どもを理解する

入学時の子どもの発達や学びには個人差があり、それぞれの経験や幼児期の教育を踏まえたきめ細かな指導が求められる。そのためには、幼稚園教育要領等を読んだり、実際に幼稚園・保育園等を訪問し教職員と情報交換したり、指導要録等を活用したりして、幼児期の学びと育ちの様子や指導の在り方を生かしてスタートカリキュラムを編成することが求められる。

#### ② 時間割や学習活動を工夫する

入学当初は、子どもの生活リズムに合わせた時間の設定を行う。例えば、朝の会から1時間目にかけて、幼児期に親しんできた遊びや活動を取り入れたり、友達と仲良く交流する活動をおこなったりすることで、生き生きと楽しい気持ちで1日の学校生活を始めることができる。

また、入学当初の児童は、長時間じっと椅子に座って学習することが難しく、身体全体を使って学ぶという発達上の特性がある。そこで、この時期の子どもの学びの特徴を踏まえ、例えば、15分や20分程度のモジュールで時間割を構成したり、活動性の高い学習活動を行ったりすることが求められる。さらに、子どもの実態や学習活動に応じて、2時間続きの学習や、生活科を中心とした合科的・関連的な指導を行うなど、弾力的な時間割の作成を工夫することも大切である。

#### ③ 安心して学べる学習環境を整える

スタートカリキュラムの実施にあたっては、子どもが安心して学べる学習環境を整えることが大切である。



特に、入学当初は、意図的に園と同じような生活空間をつくるようにする。例えば、生活科ルームのような広い場所で床に座って読み聞かせをしたり、輪になって会話したりするなどによって、園での生活の延長として、安心感をもって活動に取り組めるようになる。



園と同じような環境で会話や自由遊びを楽しむ1年生

また、自由に遊べる時間や場所、コーナーを用意することで、自分で活動を選び、自分から取り組む。そのことで、自ら学びに向かっていく意欲もわいてくるなど、幼児期に培った資質・能力が多いに生かされるものと考えられる。

④ 全校体制で取り組む

全教職員でスタートカリキュラムの意義や考え方などを共通理解し協力体制を組むなど、学校全体として取り組む姿勢が求められる。また、保護者にもその意義について学級懇談会や学年だより等を使って理解を得ることも大切となる。

(5) 実践事例（行田市立南河原小学校）

①-1 単元名「がっこうと なかよし」（スタートカリキュラム）4月上旬～中旬

①-2 事例の概要・計画

本校では、4月当初を児童が安心して小学校生活に慣れる時期と設定し、生活科を中核としたスタートカリキュラム「がっこうと なかよし」を編成した。児童が自分のよさを発揮しながら主体的に活動できるように、幼児期に近い環境を用意したり、弾力的に時間割を編成したりして、幼児期に育んだ力を小学校生活でも発揮できるように工夫した。また、スタートカリキュラムを通して児童が学校内への興味・関心を広げていく様子を見取りながら、生活科の学校探検へと思いや願い、活動をつなげていくこととした。

①-3 単元の目標

幼児期に親しんだ活動を取り入れたり、分かりやすく学びやすい環境づくりをしたりすることを通して、児童が学校生活に慣れ、安心できるとともに、楽しく学習しようとする意欲をもてるようにする。

①-4 単元計画 14時間扱い（生活科7時間＋他教科等7時間）

	活動名（時間数）	活動内容	合科的に扱う教科等	「10の姿」との関連
1	なかよく なるう (2時間)	・幼児期に近い環境の中で、折り紙、お絵かき、読書等、やりたい活動を選んで遊ぶ。 ・幼児期に経験した遊びを中心に、手遊びや歌、ダンス等をして楽しむ。	音楽 国語 図画工作 学級活動	(1) 健康な心と体
2	こうていで あそぼう (3時間)	・校庭にある遊具で遊ぶ。 ・遊具で遊ぶ過程で、友達と楽しく遊ぶために必要なルールやマナーを考える。	体育 道徳	(1) 健康な心と体 (4) 道徳性・規範意識の芽生え
3	いっしょに あそぼう (3時間)	・鬼ごっこや砂場遊び等、グループで遊ぶ遊びを中心に楽しむ。 ・役割を考えたり、分担したりして仲間づくりを意識して遊ぶ。	体育 道徳 学級活動	(3) 協同性 (6) 思考力の芽生え
4	がっこうを あるこう (3時間)	・みんなで学校探検をする。 ・職員室や校長室、保健室等に行き、どんな人がいるかを知るとともに、挨拶などの仕方を考える。 ・校庭の花や虫、飼育動物などを見付ける。	国語 算数 道徳	(5) 社会生活との関わり (7) 自然との関わり・生命尊重
5	みつけたことを つたえあおう (3時間)	・楽しかった遊びや学校探検で見つけたもの等を中心に絵に表す。 ・絵に表現したものをみんなで伝え合う。	図画工作 国語	(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心 (9) 言葉による伝え合い (10) 豊かな感性と表現

※(2) 自立心はすべての場面で

②実践の様子

以下の表は、単元計画を週案簿に落とし込んだものの一部である。

◆南河原小学校のスタートカリキュラム◆

〈第1週目のねらい〉心をほぐし、先生や友達と仲良くなる ※【 】はスタートカリキュラム関連

	4月10日(月)	4月11日(火)	4月12日(水)	4月13日(木)	4月14日(金)
行事	入学式(午後)	発育測定			
朝の活動		【なかよくなるろう】 ・手遊び ・歌って踊ろう	【なかよくなるろう】 ・手遊び ・歌って踊ろう	【こうていで あそぼう】 ・遊具遊び ・鬼ごっこ など	【こうていで あそぼう】 ・遊具遊び ・鬼ごっこ など
1校時		音楽 「うたでなかよし」 ・手遊び歌 ・校歌 ・今月の歌	国語 ・学習の約束 ・鉛筆の持ち方 ・初めての名前	国語 ・ひらがなのけいこ ・「あさ」を声に出して読む ・読み聞かせ	国語 ・ひらがなのけいこ ・「あさ」を声に出して読む ・読み聞かせ
2校時		学級活動 ・自己紹介 ・机・ロッカーの使い方 ・トイレの使い方	体育 【こうていで あそぼう】 ・遊具の使い方 ・遊具で遊ぶ	算数 「なかまづくりとかず」 ・仲間見つけゲーム ・じゃんけんゲーム	図工 「すきなもの いっぱい」 ・画用紙に好きなものをいっぱい描く
3校時		発育測定	生活 【がっこうを あるこう】 ・保健室、職員室、校長室を探検	生活 【がっこうを あるこう】 ・2階にある教室を探検	算数 「なかまづくりとかず」 ・仲間見つけゲーム ・じゃんけんゲーム

入学式から2日後、さっそく1年生の児童は、担任と一緒に学校めぐりを始めた。まずは、1年生の教室から一番近い職員室と保健室を訪れた。校長室の前で、「ここは園長先生のお部屋？」と質問した児童に、担任が「園長先生と同じように、小学校には校長先生がいらして、お仕事をするお部屋です。幼稚園の時は、園長室に入るときは、どうしていましたか。」と説明している。このように、園時代の学びを尊重しながら、似ていることや違うことを一緒に考え相談しつつ、適応指導をすすめる学習規律の確立に努めている。

また、他学年の児童が運動や読書、漢字計算の基礎学習をする朝の活動の時間を、1年生は教室や校庭での自由遊びの時間とした。児童は当初、滑り台やジャングルジム、ブランコやタイヤとび等、思い思いの遊びをしている。その中から、鬼ごっこやタイヤジャンケンといったグループでの遊びが発生したり、タンポポやシロツメクサの指輪を作ったり、虫取りに夢中になったりと、遊びが広がっていく。担任は、遊びに入れぬ児童や戸惑っている児童に声をかけ遊びの輪に加わせていく。

時間割の工夫としては、朝の会から1時間目を連続して設定し、幼児期に親しんできた歌やダンス、絵本の読み聞かせ、児童からのお話タイムなど、1日のスタートを楽しい気持ちで迎えらるるようになっている。環境の工夫としては、生活科室にローテーブルや絵本、廃材などを配置した。児童は、幼稚園や保育園でやっていた折り紙やお絵かき、読書など、やりたい遊びを楽しんでいた。

スタートカリキュラムにおいては、1年生の児童にとって幼児期の生活に近い活動があったり、分かりやすく学び



朝の活動で自由遊びを楽しむ1年生



ジャンケンゲームを楽しむ1年生

やすい環境の工夫がされていたり、人と関わる楽しい活動が位置付けられていたりすることが安心につながる。また、安心して生活することで自分の力を発揮できるようになり、自信を深め、次なる活動への意欲も高まっていく。その様なことを繰り返しながら、児童は学習者として自立していくものとする。

③評価の工夫

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、児童期の初期に目指す姿とも重なるものとする。そこで、スタートカリキュラムを実施しながら、児童一人一人のこれまでの学びと育ちを「10の姿」をもとにして評価しつつ、児童理解に生かすこととした。

右の表は、日々の活動やスタートカリキュラム、学校探検といった学習において、児童がどのような「10の姿」を発揮しているかを

「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」見取り表 1年1組

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	健康な心と体	自立心	協同性	道徳性・規範意識の芽生え	社会生活との関わり	思考力の芽生え	自然との関わり・生命尊重	数量・図形・図表・文字等への関心・感覚	言葉による伝え合い	豊かな感性と表現
1						●□		□		
2										
3							○●□			
4			○●□	●□						
5		○●□	○●□			●□			□	
6										
7							●□			
8			□							

を毎月記録したものを、一枚の表にまとめたもの的一部分である。表の記号は、それぞれ、○が4月、●が5月、□が6月にチェックがあったことを表している。本実践学級（児童数24名）では、4月末では14、5月末では22、6月末では34と、記録簿にチェックされる「10の姿」の数が明らかに増えてきた。これは、入学以来、日々多様な学習や活動を経験した児童が、安心して「10の姿」を発揮する機会が増え、伸び伸びと学校生活を送るようになったことによるものとする。

6.2 生活科を中核とした年間のカリキュラム・マネジメントの事例

各学校において作成されるカリキュラムは、従来、教科としてのまとまりが中心であった。ここでは、子どもが主体的に学習に取り組めるカリキュラムにするために、子どもの意識の流れを大切にする。そのために、他教科等も含めた学習活動において関連性を持たせたカリキュラムとなるように工夫するためのマネジメントの在り方を提案するものである。

(1) 低学年教育の充実と生活科の役割

平成29年3月告示の学習指導要領改訂では、これまで以上に低学年教育の充実が求められている。小学校学習指導要領<sup>(10)</sup>「総則」には、教育課程の編成に当たって配慮すべき事項として、低学年教育全体について次のように示されている。

また、低学年における教育全体において、例えば生活科において育成する自立し生活を豊かにしていくための資質・能力が、他教科等の学習においても生かされるようにするなど、教科等間の関連を積極的に図り、幼児期の教育及び中学年以降の教育との円滑な接続が図られるよう工夫すること。（「総則」第2-4 学校段階等間の接続 (1)）

このように、低学年教育の中核に生活科を位置付けることが求められている。生活科は、教科等を貫く横軸としては、その学びや資質・能力が他教科等の学習に生かされたり、逆に、他教科等の学びが生活科の学習に生かされたりと、相互に関連し合いながら総合的に資質・能力を高めていくことが求められている。年間指導計画の作成においては、それらを意識した計画立案が求められる。

また、縦軸としては、幼児教育と中学年教育とをつなぐ中心的な役割を担うことになる。主に生活科の学習を通して、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が発揮できるような工夫を行うことにより、幼児期に総

合的に育まれた資質・能力を、徐々に他教科等の学びにつなげていくことになる。さらには、生活科の学びが、中学年以降の社会科や理科、総合的な学習の時間へと発展していくことが求められる。そのため低学年担任だけでなく、学校全体で児童一人一人の育ちの見通しを共有して、教育課程を編成することが求められる。

さらに、平成29年3月告示の小学校学習指導要領<sup>(10)</sup>「生活」には次のように示されている。

(4) 他教科等の関連を積極的に図り、指導の効果を高め、低学年における教育全体の充実を図り、中学年以降の教育へ円滑に接続できるようにするとともに、(中略)生活科を中心とした合科的・関連的な指導や、弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫をすること。(「生活」第3-1(4))

心と体を一体的に働かせながら総合的に学ぶ低学年児童の特性から考えて、低学年における教科等の学習は互いに関連付けて展開することが大切である。例えば、生活科の学習で思いきり虫取りを楽しんだ児童は、図工の時間に虫取りの絵をダイナミックに表現することができるだけでなく、その活動に意欲的に取り組むといった傾向がある。そこで、今後はより一層、低学年の全ての教科等と生活科との関連を図り、指導の効果を高めていくことが求められている。

## (2) 他教科等との関連

小学校学習指導要領解説<sup>(10)</sup>生活編では、他教科等との関連について、次のように解説している。

「他教科等との関連では、生活科と他教科等との合科的・関連的な指導を行ったり、低学年の児童の生活とつながる学習活動を取り入れたりして、教科等横断的な視点で教育課程の編成、実施上の工夫を行うことが重要である。それにより、生活科における学習活動が他教科等での題材となったり、生活科で身に付けた資質・能力を他の教科等で発揮したり、他教科等で身に付けた資質・能力が生活科において発揮されたりして確かに育成されるなど、一層の学習の効果が期待できる。」

また、他教科等との関連を図った指導の在り方として、具体的に次の三点を上げている。

- ①生活科の学習成果を他教科等の学習に生かすこと
- ②他教科等の学習成果を生活科の学習に生かすこと
- ③教科の目標や内容の一部について、これを合科的に扱うことで指導の効果を高めること

このような学習指導を展開することによって、児童の思いや願いを生かし、主体的な活動が実現できる。低学年の時期に、他教科等との関連を図り、児童が思いや願いを存分に発揮しながら体験を通して学ぶことは、求められる資質・能力を育成していくことにつながるものと考えられる。

## (3) 他教科等との関連に重点を置き、指導の効果を高めるように配慮した年間指導計画例

年間指導計画を作成する上で、次のようなことに留意することが求められる。

- ①生活科の学習成果を他教科等の学習に生かすためには、生活科の目標や内容の実現とともに、関連する他教科等の目標や内容が一層効果的に実現できるように配慮する。
- ②他教科等の学習の成果を生活科の学習に生かすためには、相互の関連について検討し、指導計画に位置付けておくことが大切である。
- ③同じ時期に学習したり、合科的に扱ったりした方が、より一層の学習効果が図れるような場合には、単元等の実施時期の入れ替えを行うことも必要である。

【生活科を中核とした単元配列表例（第1学年1学期）】

はじめに、次のような単元配列表を作成し、この配列表を基にしながら、学習活動が生活科と関連する教科等を組み合わせて指導計画を立てていくようにする。その際は、子どもの思いや願いを大切にしながら展開を工夫していくことが求められる。

教科等	4月	5月	6月	7月
生活	がっこうと なかよし (7時間)	がっこう たんけん (15時間)		なつだ あそぼう (9時間)
	スタート カリキュラム	はなを そだてよう (11時間)		
国語	あいさつ (ス・合) どうぞよろしく (ス) がっこうの もじたんけん (関) こえにあわせて あいうえ お・あさ	えをみてはなそう はなのみち (関) ぶんをつくろう (関) わけをはなそう (関)	くちばし おむすびころりん おもいだして はなそう (関) おおきくなった (関)	たからものを おしえよう (関) すきなことなあに おおきなかぶ こんなことしたよ (関)
算数	なかま づくりとかず (ス)	なんばんめ いくつといくつ	あわせていくつ ふえるとい くつ のこりはいくつ つがいはい くつ	10よりおおきいかず (関) なんじ なんじはん (関)
音楽	うたでなかよしになろう (ス)	拍をかんじて あそぼう	拍をかんじて リズムをうとう	拍をかんじて リズムをうとう
図工	すきなもののいっぱい (ス・合) 「じぶんマーク」で みんなともだち (合)	ひかりのくにのなかまたち クルクルぐるーり	いろいろならべてあそぼうよ (関) チョッキンパでかざろうよ (関)	しぜんとなかよし (合) みてみていっぱいつくったよ
体育	遊具遊び (ス) ケンパーとび (ス) かけっこ・鉄棒遊び	表現リズム遊び	マット遊び	水遊び
道徳	たのしい がっこう [節度、 節制] (ス) あかるい あいさつ [礼儀] (関)	かぼちゃのつるが みんなのこうえん [規則の尊 重] (関) にゃんとと光る小石	きんのおの めだかのめぐ [自然愛護] (関)	たすけて さんぽ
学級 活動	今日から1年生 (ス) トイレの使い方 給食の仕方	避難訓練 下校の仕方 (関) がんばれ運動会 遊び集会を開こう	きれいな菌 水泳のきまり 雨の日の過ごし方	初めての夏休み 知らない人についていけない お楽しみ会をしよう

※ゴシック体は生活科の学習と合科的・関連的に扱う単元や題材

※ (ス) スタートカリキュラムに関連した単元や題材

※ (関) 生活科の学習と関連した単元や題材

※ (合) 生活科の学習と合科的に扱う単元や題材

【他教科等との関連を明記した生活科の年間指導計画例（第2学年1学期）】

生活科の年間単元配列表から、単元ごとに関連する教科等の学習活動を抽出して、生活科の目標と併せて他教科等の目標も達成できるように計画したものである。実践に当たっては、単元の展開に沿って、目標の達成状況を把握することが求められる。

月	単元名 (時間数)・主な活動	他教科等の単元及び題材・関連の意図
4月	ほくも わたしも 2年生 (4時間) ・1年生と一緒に遊ぶ	学校行事「一人一鉢 花づくり」 ○花を育てる活動を通して、栽培への関心を高める。
5月	やさいよ 大きくなあれ① (9時間) ・育てたい野菜を決める ・土作りをして、種を播く	国語「かんざつ名人になろう」 ○野菜を育てたり、観察したりしたことが分かるように、組み立てを考えて書く。
6月	すてきな町さがし① (25時間) ・学校の周りを調べ、探検計画を立てる ・探検の準備や、安全やマナーの確認をする ・方面別に探検に聞く ・探検の報告会をする	国語「今週のニュース」 ○相手に知らせたいことを町探検の中から探し出し、文章に表す。  道徳「規則の尊重」 ○公園等では、自分勝手な行動はいけないことを知り、約束や決まりを守ろうとする態度を養う。
7月	やさいよ 大きくなあれ② (13時間) ・野菜の世話や収穫をする	算数「長さしらべ」 ○野菜の成長を記録し、長さ調べができるようにする。

## 7. おわりに—研究の成果と今後の課題—

生活科を中核に据えてカリキュラム・マネジメントすることで、以下のような成果が得られた。一つは、教科等関連が明確になることである。特に、スタートカリキュラムにおいては、具体的な活動や体験を通して学ぶ生活科は、子どもたちに小学校での学びと幼児期の学びを結び付ける役割を果たす教科である。その意味では、教師自身が幼児期の学びを意識して1年生の入学時の授業を展開できるようになることが期待できる。二つは、教科を中心とした自覚的な学びへもスムーズに発展させることができるものとする。幼児期の学びは遊びを通じた学びであるのに対して、教科を中心とした意図的・計画的な学びとの接続を図ることができるようになることが期待できる。これは、幼児期までに子どもたちの中に育ってきた姿を、一人一人把握し、それらの力を発揮させることができる学習活動と結び付けることで、一人一人にやる気と自信をつけることができるためと考えられる。幼児期の終わりまでに身に付けてきた資質・能力を発揮させる場を効果的に位置付けたカリキュラムの成果とも考えられる。三つは、スタートカリキュラムだけでなく、生活科を中核に据え、教科等の関連を図るカリキュラムは、子ども自らに学びの視点を発展させていく力を身に付けさせる上での効果が期待できるものとする。今後、様々な学習活動で、主体的・対話的で深い学びが求められることから、小学校教育のスタート時に、学習の本質である主体的な学びの価値を自覚させることは極めて重要なことである。

各学校におけるカリキュラム・マネジメントは、これから取り組まれる学校が多いところである。本研究では、小学校低学年における生活科を中心としたカリキュラム・マネジメントの意義と手順を明らかにしてきた。また、先進的に取り組まれた行田市立南河原小学校の事例を取り上げ、より具体化しようとしたものである。今後の課題は、子ども主体のカリキュラム・マネジメントの在り方として、以下の3点について研究を深めて行きたい。一つは、生活科を中核にしたカリキュラムの実施を通して、子どもが主体的に学ぶことの大切さを自覚していく過程を追跡的に調査するとともに、子どもの変容を調査して、カリキュラムの成果を明らかにする。二つは、他校での事例と比較検討しながら、PDCAサイクルによるカリキュラム・マネジメントの効果的な在り方を深めていく。三つ、小学校中学年以降における総合的な学習の時間を中核としたカリキュラム・マネジメントの在り方について、具体的な手順と実践を通じた子どもの学習活動の変容に関して明らかにしていきたい。

引用文献・参考文献

- (1) 文部科学大臣, 『初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について (諮問文)』, 2014.11.20
- (2) 中央教育審議会, 『幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)』, 2106.12.21
- (3) 中央教育審議会, 『幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)』, 2016.12.21, pp23-24
- (4) 田村学, 『カリキュラム・マネジメント入門』 東洋館出版社, 2017
- (5) 村川雅弘・八釵明美・三田大樹・石堂裕, “資質・能力の育成につながるアクティブ・ラーニング”, 『せいかつか&そうごう第24号』, 日本生活科・総合的学習教育学会, 2017, pp14-23
- (6) 若手三喜雄・杉江純子・伊東由美子・岩切美樹・野田みづ子, “他教科等との関連を図った指導の工夫—子どもの意識の流れに沿った支援の在り方—”, 『せいかつか第6号』, 日本生活科・総合的学習教育学会, 1999, pp84-91
- (7) 文部省, 『小学校学習指導要領』, 1989  
文部省, 『小学校指導書生活編』, 1989
- (8) 文部科学省, 『小学校学習指導要領』, 1998  
文部科学省, 『小学校学習指導要領解説生活編』, 1999
- (9) 文部科学省, 『小学校学習指導要領』, 2008  
文部科学省, 『小学校学習指導要領解説生活編』, 2008
- (10) 文部科学省, 『小学校学習指導要領』, 2017  
文部科学省, 『小学校学習指導要領解説生活編』, 2017
- (11) 文部科学省, 『幼稚園教育要領』, 2017
- (12) 中野重人, 『改訂生活科教育の理論と方法』 東洋館出版社, 1992, 第2章生活科の意義と特色
- (13) 中央教育審議会, 『幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)』, 2016.12.21, pp155-160
- (14) 埼玉県教育委員会, 『接続期プログラム—幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続を目指して—』, 2012
- (15) 埼玉県教育委員会, 『接続期プログラム実践事例集—幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続を目指して—』, 2013
- (16) 奥川正規, “幼稚園や保育園で培った育ちや学びをもとに子どもが幼保小で接続していくために—スタートカリキュラムを子どもをとらえたうえで考察して見えてきたもの—”, 『生活科・総合の実践ブックレット』, 日本生活科・総合的学習教育学会, 2016, pp4-17
- (17) 木村吉彦・仙台市教育委員会, 『スタートカリキュラムのすべて—仙台市発信・幼小連携の新しい視点—』, ぎょうせい, 2010
- (18) 横浜市こども青少年局, 『学びと育ちをつなぐ—横浜版・接続期プログラム』, 2012
- (19) 無藤隆, 『学習指導要領改訂のキーワード』, 明治図書, 2017
- (20) 奈須正裕, 『「資質・能力」と学びのメカニズム』, 東洋館出版社, 2017

